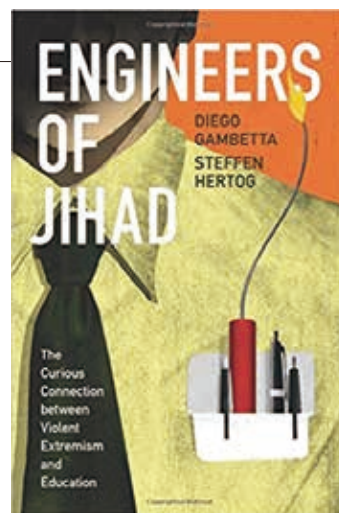


Diego Gambetta and Steffen Hertog

### ***Engineers of Jihad: The Curious Connection between Violent Extremism and Education***

Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2016.



桜井 啓子

早稲田大学国際学術院教授・イスラーム地域研究機構長

過激派の暴力は、時として歴史の流れを変えるほどの影響力を持ってきたにもかかわらず、彼らについて我々が理解していることはあまりにも限られている。兵力という点で著しく不利で、成功の確率が極めて低いときに、どのような人が暴力的な道を選ぶのか。運動の拡大に成功したとしても、結局は壊滅される。それにもかかわらず、なぜ一握りの人たちは、暴力的過激派に加わるのだろうかと本書の著者たちは問う。本書の著者である European University Institute 教授 Diego Gambetta 氏と London School of Economics 准教授の Steffen Hertog 氏は、これまでの研究にはなかったような方法、つまり「暴力的イスラーム過激派にエンジニアの占める割合が多い」という事実から出発し、教育のレベルと専攻という比較的入手しやすいデータをもとにイスラーム過激派の特徴とそれが出現するメカニズムについて考察した。エンジニアに着目することの利点は、性別、年齢、出身地といった生得的な特徴ではなく、大学において工学を専攻するという本人の「選択」を考慮することができるからだという。

本書は、1975年から2005年の間に活動した異なるタイプのイスラーム主義者の活動を考察の対象としている。すなわち、平時にイスラーム諸国で生まれ、活動しているイスラーム過激派、西欧諸国で誕生ないしは育ったイスラーム過激派、イスラーム諸国出身の非暴力的イスラーム主義者、革命前のイランのイスラーム過激派、暴力的手段を放棄したイスラーム過激派である。ただし、ナ

イジェリアのボコハラム、ソマリアのアル・シャバブ、アフガニスタンのターリバーン、イラクとシリアのISISなど一定の領土的基盤を持つ大規模な過激派は、小規模な過激派とは、性格を異にしているという理由で考察の対象から外されている。

本書はまた、イスラーム過激派の特性を明らかにするために、第二次世界大戦の前後に活動した極右と極左の運動との興味深い比較も試みている。考察の対象となっているのは、初期のナチズムとイタリアのファシズム運動、ドイツとオーストリアのネオナチ運動、米国とロシアの白人至上主義者、スパルタクス団、ドイツ赤軍、イタリアの赤い旅団、世界各地のアナーキストなどであり、計4千人のデータを扱っている。以下、章ごとに本書の内容を紹介したい。

第1章では、1970年代以降にイスラーム諸国で活動するイスラーム過激派497名を分析している。全員が男性で、欧米生まれ・欧米育ちは含まれていない。生年が判明した300名の平均は1968年である。データは、学術書、政府文書、ウェブサイトなどから集めたもので、イスラーム諸国を平均的に網羅しているわけではないが、国籍は三大陸35か国にまたがっており、権威主義体制に対抗するタクフィール・ワ・ヒジュラ、占領に抗するハマース、反西欧を掲げるアルカーイダなど、目的も戦略も異なる多様なグループのメンバーが含まれている。教育に関する情報が得られたのは335人で、そのうち231名が高等教育を

受けている。専攻が判明した207名のうち、最も多いのが工学で93名、続いてイスラーム学38名、医学21名である。過激派に占めるエンジニアの割合は、過激派の出身国の労働人口に占めるエンジニアの割合の17倍という結果になった。ただし、サウディアラビアは例外で、過激派に占めるエンジニアの比率が低い。

それでは、なぜ過激派に占めるエンジニアの比率が高いのか。その理由について本書は、過激派のリクルーターは、爆発物の製造や通信技術を有する人材を標的にしたのではないかという仮説を立て、様々なケースを検証した。その結果、一般に爆弾製造にかかわる人物はごく少数で、その傾向はグループが大きくなるほど顕著である、イスラーム過激派による暴力行為の多くは、高度な専門性を必要としていない、エンジニアがほとんど参加していないサウディアラビアの過激派が爆弾攻撃を実施している、過激派の中での役割分担が明らかとなっている228名中、爆弾製造にかかわったのは全体の15パーセントで、工学の学位を持っている人のなかで爆弾製造にかかわったのは、15パーセントといった事例を挙げ、上記の仮説は立証できないとしている。

本書は、過激派にエンジニアが多いのは、友人、家族、職場など身近で親しい人をリクルートした結果であるという仮説についても検証を試みている。発覚を恐れて身近なネットワークを利用してリクルートするというのは十分にあり得ることだが、北アフリカ、南アジア、パレスチナ、アラブ諸国における過激派のいずれにおいてもエンジニアの割合が高いことから、ネットワークによるリクルートのみでは説明がつかないとし、この仮説も成り立たないとしている。またエンジニアはインターネットを介してつながりやすいのではないかとの指摘もあるが、本書が利用したデータの多くは、インターネットが普及する以前のものであるため、そうした仮説も成り立たないとしている。

また上記のデータから、教育程度が高いほど過激派に加わる可能性が高く、専門性の高い学位を持つ人ほど、その傾向が高くなることが読み取れるという。言い換えれば、イスラーム主義運動の

中核をなしているのは、エリート予備軍であり、貧困層ではないということである。

第2章では、イスラーム諸国において若者が過激化する原因を、どの程度「相対的剝奪」によって説明できるかを論じている。イスラーム過激派に加わるエンジニアが増加するのは1970年代以降の現象で、それ以前は、そのような兆候は見られなかったことについて、本書は、アラブ諸国を事例に以下のように説明する。すなわち、1950年代から60年代にかけて、エンジニアは開発プロジェクトを推進するエリートとして大きな役割を果たすことができたが、1970年代に入ると高等教育の大衆化と工業化の不振、さらに1982年の石油価格の暴落で雇用状況が悪化し、エンジニアを取り囲む状況が厳しさを増した。そうした中で、エンジニアの間で、失業による個人的な不満に加え、自国の経済的遅れや西欧の圧倒的な技術力に対する無力感が広がり、相対的剝奪感が増大した。一方、エンジニアを含む大卒者の就職状況が良好であったサウディアラビアでは、同様の傾向は認められなかった。しかし、著者たちは、相対的剝奪だけでは説明できない事例があるとし、次章でさらなる検証を試みている。

第3章では、相対的剝奪による説明の妥当性について更なる検証を行っている。もし相対的剝奪が原因であるならば、エンジニアの就職条件がよい西欧諸国ではエンジニアは過激派に参加しないことになるはずである。また相対的剝奪は、どのような人が反体制運動に惹きつけられるのかを説明することはできても、参加者がどのような運動を選択するのかについては説明できないとし、エンジニアが就職において不利とは言えない西欧諸国における過激派の教育歴、暴力的運動と非暴力的運動におけるエンジニアの割合について分析を加えている。

一つ目の問いを検証するために、西欧生まれのイスラーム過激派、344名（うち338名が男性）のデータを集めた。対象となったのは、暴力的行為への関与が明らかにされている個人で、米国（87名）、英国（63名）、スペイン（60名）、フラン

ス(56名)など全12か国の市民で、生年の平均は1978年、逮捕あるいは死亡した平均年齢は28歳である。教育に関するデータが得られたのは122名で、そのうち高等教育機関に進学しているのは83名である。西欧諸国の平均的な進学率に比べると過激派に加わった若者の学歴は相対的に低く、専門職などへの就職率も低いことが明らかとなった。また高等教育機関に進学した83名のうち、専攻が判明したのは71名で、エンジニアは32名、医学7名、数学・科学11名で、エンジニアが多いことがわかる。また、参加者の多くは、組織にリクルートされて参加したというよりも自ら率先して参加した傾向にあることも判明している。

以上から暴力的イスラーム運動におけるエンジニアの比率が高いという傾向が明らかとなったが、非暴力的な運動においても同様の傾向がみられるのだろうか？これについて著者らは、イスラーム諸国のイスラーム運動に関する過去の研究から、暴力的運動においてエンジニアの比率がより高くなる傾向にあると結論づけている。

また宗教的過激運動と非宗教的過激運動とを比較した場合、前者に占めるエンジニアの比率がより高くなる傾向にある。それを示す事例として、革命前のイランとパレスチナの事例を取り上げている。1970年代にイランの反国王運動に参加したゲリラのメンバーで、秘密警察SAVAKに殺害された341名のうち学歴が判明した306名を分析した。高等教育修了者の比率は、世俗的ゲリラは28パーセント、宗教的ゲリラは26パーセントと、大きな差は見られないが、工学専攻者の比率は、世俗的ゲリラの場合は3分の1以下であるのに対して、宗教的ゲリラの場合は2分の1以上であった。

パレスチナの事例としては、宗教的なハマースと世俗的なファタハが取り上げられている。ハマースの構成員の専攻は、工学(38パーセント)とイスラーム学(32パーセント)の占める割合が突出しているのに対して、ファタハの場合は、医学(21.7パーセント)、政治学(20パーセント)、ビジネス(18.3パーセント)、人文学(13.3パーセント)、工学(11.7パーセント)などメンバーの専攻は分散している。

第4章では、イスラーム過激派と西欧の極左、極右運動のイデオロギーを比較している。著者たちは、イスラーム過激主義に共通する特徴のうち、特に伝統主義、協同主義、階層的な社会観、社会的な不平等の是認、権威主義、反ユダヤ主義、失われた過去の回復、腐敗・墮落の浄化、厳格なメンバーシップ、反多元主義、社会問題を単一の原因に帰する思考、敵対的世界観、暴力の正当化といった項目において、文化的脈絡の相違にもかかわらず極右運動と共通点が多いと指摘している。一方で、極左運動には、上記のようなイスラーム過激派の特徴は確認できないと結論付けている。

第5章では、第二次世界大戦後の欧米の極左と極右のメンバーの教育歴を用いて、エンジニアがこれらの運動にどの程度参加しているのかを分析している。極左の事例として取り上げたドイツ赤軍とイタリアの赤い旅団では、大卒者の比率は高いが、エンジニアの参加は限られていることが判明した。米国、ラテンアメリカ、インドの極左運動に関する先行研究でも同様の傾向が指摘されているという。

極右の事例には、ネオナチ運動を取り上げている。ドイツとオーストリアのネオナチ運動はドイツやイタリアの極左運動と同程度に過激であるが、組織化のレベルは低く、メンバーの多くが社会の周縁に属する人たちで、高等教育を受けている人は限られている。ロシアのネオナチ運動のメンバーは、国粹的・人種主義的で、一部は宗教的である。指導層は高学歴で、エンジニアの比率が高い。アメリカのネオナチ・白人至上主義運動は、反ユダヤ主義、反政府的で、一部は、キリスト教会と強い繋がりを持っている。ここでも指導層におけるエンジニアの比率が高いことが判明した。

著者たちは、以上の分析から以下の7点を重要な特徴とみなす。

1. エンジニアは、イスラーム諸国では相対的剝奪が原因で過激化する。
2. 南アジアや欧米生まれのイスラーム主義者の事例から、エンジニアは、社会的に上昇できないことへの強い不満がなくとも過激化する傾向にある。



3. 先進国では、極右運動に参加するエンジニアがいる一方で、極左運動にエンジニアはほとんど参加していない。
4. 人文社会科学専攻者は極左運動に参加する傾向にあるが、極右とイスラーム過激派への参加は限られている。
5. エンジニアは、穏健よりも過激イスラーム主義グループに参加する傾向にある。
6. エンジニアは、選択肢がある場合でも世俗的な左派やナショナリスト的な運動よりも宗教的な運動に参加する傾向にある。
7. エンジニアは、大義に忠実で離反する傾向が少ない。

第6章で著者たちが問題として取り上げたのは、工学を専攻した者は、イスラーム過激派ないしは極右運動に、人文学や社会科学を専攻した者は極左運動に参加する傾向にあるという事実である。なぜこのような傾向が生じるのかを明らかにするために、著者たちは、イスラーム過激派にどのような認知的・情緒的特性を見出すことができるのか、そうした特性は、極右とイスラーム過激派の双方に見出すことができるのか、共通する特性があるとすれば、それがエンジニアにより顕著にみられるのかといった点を明らかにする必要があると述べる。

著者たちは、まず先行研究によって明らかにされている三つの性格的特徴に着目する。一つ目は、「嫌悪」である。極右やイスラーム過激派に共通しているのは、道徳性や純粋性への強いこだわりである。二つ目は「認知的完結欲求」、つまり曖昧さを嫌い、確固たる答えを求める性向である。三つ目は、内集団と外集団を厳格に区別する性向である。

次に、これら三つの特徴が、専攻の異なる人たちの間にどのように分布しているのかを調査するために、ヨーロッパ社会調査(2002年、2004年、2006年、2008年)からヨーロッパ17か国、11,183名の男性(うち工学専攻3,320人、社会科学専攻690人、人文・芸術専攻928人)の「態度」に関するデータを利用した。たとえば、「同性愛者は自らが望むように生きる自由がある」、「家族や宗

教的伝統は重要である」、「収入格差は努力への報酬として容認できる」、「学校は子供たちに権威への服従を教えるべき」、「国家は市民を守るために強くあるべき」、「創造性・独創性の重視に反対」といった考え方に対する態度をもとに、先に示した三つの性格的特徴を探った。さらに著者たちは、政治心理学の専門家が議論してこなかった四つ目の性格的特徴として「単純化」、つまり複雑な問題を唯一の原因や解決策に帰する傾向を挙げている。さらに回答者の自己申告による政治的傾向に関するヨーロッパ社会調査と回答者の専攻の関係についても調べた。その結果、経済学、法学、工学専攻者は、平均より右寄りで、社会科学や人文学の専攻者は左寄りだという結果がでた。イスラーム諸国における同様のデータは存在しないが、参考として、1948年にカイロ大学の学生3,890人を対象に実施された調査では、ファシズムのイデオロギーに共感する学生の比率は工学専攻者に最も多かったというデータを紹介している。これらの分析を通じて、大学における専攻と性格的特徴と政治的志向の間には明らかな相関関係があると結論付けている。

以上の分析を踏まえ、終章では、本研究の結果を以下のように総括している。第一は、なぜ過激派に加わるのかという問いに対して、中東の場合は、相対的剝奪と挫折が答えとなりうることが明らかとなった。学生の中でもエリートとみなされているエンジニアの間に、努力が報われず、不当に剝奪されているという感情が共有されていると考えられる。しかし、エンジニアの就職状況が悪くない西欧や南アジアでも、過激派に加わるエンジニアが多いことから、相対的剝奪を唯一の原因とすることはできない。

政治的暴力に関する既存の理論では、なぜ過激派にエンジニアが多いのかを説明できない。この問いに答えるために極右、極左運動にどの程度エンジニアが参加しているかを調べた。その結果、イスラーム過激派と極右運動の双方で、エンジニアの参加比率が高いことを突きとめた。またイスラーム過激派と極右運動がイデオロギー的な特徴を共有していることも判明した。最後にエンジニ

アの性格的特徴から、左派ではなくイスラーム過激派や極右のイデオロギーにより共鳴しやすいことが明らかとなった。以上が本書の概要である。

## コメント

世界各地でイスラーム過激派によるテロが発生し、多くの犠牲者がでるたびにテロ対策の強化が叫ばれてきた。しかし、自己を犠牲にしてまでも暴力に訴えようとする人たちが後を絶たないのはなぜか、どのような人たちが過激派のメンバーになっているのかについての我々の理解は、依然として断片的、限定的である。そのようななかで本書は、暴力的過激主義と高等教育における専攻との関係に焦点を当てることで、イスラーム過激派の特性に関する新たな知見を提供した。

本書の傑出した特徴は、限られた人物の自伝的情報に基づく解釈や断片的な情報や個別のケースに基づく印象論を排し、イスラーム過激派のメンバーに関する普遍的な特徴を明らかにするために用いた方法論にある。

著者たちは、どのような人が暴力的過激主義に参加するのかを明らかにするために、デュルケームが『自殺論』において採用した方法、つまり「自殺の原因は何か」と問うのではなく、「カトリックやユダヤ教徒に比べ、プロテスタントの自殺者が多いのはなぜか」と問うことで因果関係の特定につなげるという方法が有用だとし、暴力的イスラーム過激派に占めるエンジニア、つまり大学で工学を専攻した者の比率が多いのはなぜかという問いから出発した。分析したデータは、大量とはいえないものの、国、地域、時代、イデオロギーの異なる様々な過激派を含んでおり、それらの比較を通じて、本書は、暴力的手段に訴えるイスラーム過激派と極右の類似、極左との相違を明らかにした。著者の一人Steffen Hertog氏が、この研究に10年の歳月がかかったと述べているように、本書は、比較の手法を駆使した長年の研究成果であり、イスラーム過激派に関する我々の理解に一石を投じたといっても過言ではない。

しかしながら本書によってイスラーム過激派の

すべてが明らかになったわけではない。ボコハラム、アル・シャバブ、ターリバーン、ISISなど世界的な脅威となっている大規模な過激派は、本書の対象外だ。これらの運動と本書が対象とした小規模なイスラーム過激派との間にどのような相違があるのか、ぜひ今後の研究で明らかにしていただきたい。

本書は、暴力的イスラーム過激派とエンジニアとの親和性を立証しようとしたものであるが、例外とされたサウディアラビアでは過激派に占めるエンジニアの比率が低い。本書は、その理由をサウディアラビアではエンジニアの就職状況が良く、相対的剝奪感を募らせるエンジニアが少ないからだとしているが、その説明で十分だろうか。サウディアラビアの大学で教授されるイスラーム学に、本書がエンジニアの性格的特徴とみなす道徳性や純粋性へのこだわり、確固たる答えを求める性向、内集団と外集団の厳格な区別、複雑な問題を唯一の原因や解決策に帰する等の特性を見出すことができるのではないかと。工学とイスラーム学の類似性が示唆するものについてももう少し踏み込んだ考察があってもよかったのではないかと考える。

これに関連してもう一点、コメントをしたい。本書は、極左運動に参加する女性はいるが、極右運動に参加する女性は少ないという興味深い事実に言及している。先に挙げた工学とイスラーム学の類似性は、学問的環境という点にも類似点があるのではないかと。女性の参加が増えている他の専攻に比べると、工学は、今なお男性中心の学問であり、女性の学生・教員比率が最も低い分野である。同様にイスラーム学も男性中心の学問である。女性の大学進学率が上昇し、女性もイスラーム学が学べるようになってきたが、イスラーム学の権威は男性が独占している。このようにみると、工学とイスラーム学には、男性中心の学問という共通点があり、そのことが、学生の思考や世界観に影響を与えてはいないだろうか。

また著者たちは、大学における「専攻」は、国籍、人種、性別など、生得的な特徴とは違い、本人の選択を知ることのできるデータであると述べている。しかし、イスラーム諸国では、家族の希

望で、エリート学部である工学部に進学させられるケースも多く、本人の選択とは言い切れない場合もあることに留意する必要があるだろう。

最後に指摘したいのは、特定の思考様式に親和性のある人が工学部を選択するのか、あるいは工学部の教育がある特定の思考様式や世界観を育てるのが曖昧である。本書は、人文学や社会科学を専攻した者は暴力的イスラーム過激主義に同調する傾向が少ないことも明らかにしているが、これは大学における人文学や社会科学の教育が、学生の思考様式に影響を与えた結果なのだろうか。そうであれば人文学や社会科学に希望があるということになる。読み返すたびに新たな疑問が生まれる点も、本書の大いなる魅力である。